

「小説家 渥美饒児の三島由紀夫コレクション展」好評開催中

只今開催中の企画展、「小説家 渥美饒児の三島由紀夫コレクション展」が多くの方々から好評をいただいております。

今回の展示では、渥美氏のコレクションの中から多角的に三島由紀夫を理解していただけるよう「文学」・「美学」・「行動学」と銘打って、幅広いジャンルの資料を用意しました。ここでは文学以外の見どころをご紹介します。

<映画「人斬り」で着用した着物>

三島由紀夫は写真のモデルを務めたり、映画に出演したりもしています。右の展示物は、五社英雄監督の映画「人斬り」で、彼が田中新兵衛に扮した時に着用した衣装です。

当初5組製作し、撮影後3組残ったうちの1組がこの展示品です。着物は黒地に小さい白い模様の入った薩摩がすりと小倉の袴。三島が割腹自殺した翌年(1971)に某百貨店から売り出されました。

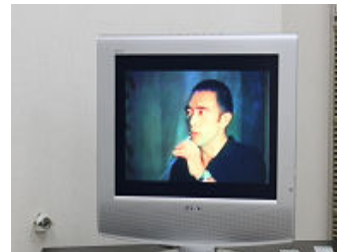
左足の膝あたりには、格闘シーンを撮影したときに付着した豚の血痕が残っています。



<映像>

60分程度に編集したDVDで、三島由紀夫という人物をいろいろな角度から紹介しています。

川端康成・伊藤整との鼎談や東大全共闘主催の討論会での話し合い、さらには自衛隊市ヶ谷駐屯地での最後の演説等の様子を、動画でご覧いただけます。もちろん三島由紀夫の生の声を聞くこともできます。



三島由紀夫辞世の2首

益荒男がたばさむ太刀の鞘鳴りに幾とせ耐へし今日の初霜
散るをいとふ世にも人にもさきかけて散るこそ花と吹く小夜嵐

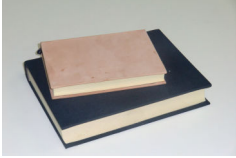
文芸館の四季



夏の雨上がり、蝉しぐれのシャワーを浴びに建物の外に出てみました。ふと下方に眼をやると、松韻亭に続く道も埋め尽くすほどの勢いでヤブミョウガが群生し、6、7枚集まった長楕円形の葉から更に上に伸びた茎の先端に、真珠のような玉状のものと、1cmにも満たない白い清楚な花を咲かせていました。

この草花の名前を知ったのは一昨年のことですが、花から受ける印象と名前からくるイメージとが、私の頭の中では未だにしっくりと収まりません。「ヤブ」という語感が野暮ったさを抱かせるのでしょうか。また、ついつい藪医者とか藪蚊とかという熟語を連想してしまいます。

そしてその連想の通り、この植物は藪蚊と共生しているのではないかと思ってしまうほど、鑑賞には痒い代償を求められます。今日も、わずか2・3分の鑑賞だったにもかかわらず、我が血を生け贄に捧げた跡が数ヶ所見つかりました。



浜松文学紀行 18

「湖郷」の詩人清水みのると伊左地

「森の水車」「星の流れに」「かえり船」「ふるさとの燈台」ほか数々の名曲を作詞した清水みのる(本名實)は、医師米造・いわ夫妻の五人きょうだいの次男として、明治36(1903)年、浜松駅から館山寺に向かう通称館山寺街道の中間地点にある浜名湖畔の伊左地に生まれた。

後年みのるは、「僕は湖郷、浜名湖のほとりで生まれ、育った事をどんなに幸福に思っているか知れない。若し僕が浜名湖畔で生まれてなかったら、『ふるさとの燈台』も『かよい船』も『ふるさとの湖』もその他一連の湖畔、船ものもこれほどには作れなかったであろう」と書いている。みのるは、浜名湖畔の故郷を敢えて「湖郷」と書くことで、亡き母を偲ぶ望郷の思いをそこに込めたのである。

兄が小学校2年のある日、校庭の鉄棒に飛びついた瞬間、手を滑らせて下に脱ぎ捨ててあった下駄の上に落下、それがもとで右手足が不自由になってしまった。そのショックもあったのか、父はそれから間もなく脳溢血で倒れ、患者の診察にも不自由をきたすようになった。母が産婆の免許を取ったのは、家計を助けるためであった。

小学校時代のみのるは手に負えないやんちゃ坊主で、同じ小学校の先生をしていた二人の姉を困らせた。4年生の時、近くの入り江で泳いでいた兄の泳ぎぶりを見て、兄の同級生の一人がふざけて兄を溺れさせようとしていた。それを見たみのるは猛然と躍り掛かり、無我夢中で相手を水の中に引きずり込んだ。翌日担任教師から厳しく叱責され、みのるの腕白の悪名はますます村中に広がっていった。

そんなみのるが見違えるほど変貌を遂げる日が来た。「思い出の記」に次の一文がある。

師範学校を出たての優しい先生の薫陶いのししによってか、私は5年の終の頃から入学準備の課外活動に精励して、もう以前のような野猪いのししのような行跡をしなくなっていた。学び疲れた後など、その若い音楽好きの先生が愛用のバイオリンを取り出してきて、中学受験で同じように課外をやっている級友2人を前にして、よく「荒城の月」とか「ユーモレスク」の曲を弾いて聴かせてくれたものであった。

大正6年2月の旧制浜松中学校(浜松北高)の入学試験に900余名が受験した。合格者150名中、みのるはなんと18番だった。「わが青春のとき」に「同行した母もそれを確認すると、もう涙・・・涙・・・。いつまでも公示板の前から動こうとしなかった。私は少年ながらその時の母の胸中がよく判るような気がした」と記している。

母の気持ちは「あのやんちゃ坊主がよくここまで頑張った。これで後継ぎができる」という喜びと家の状況からくる将来の経済的不安であったろう。湖郷をうたったものに母校「伊佐見小学校校歌」をはじめ、「森の水車」「伊左地音頭」「伊左地慕情」がある。



森の水車公園(伊左地緑地)